HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	伊藤 悟著「神の揺さぶり ： はじめてキリスト教と出会う人たちへ」(一麦出版社、1996年)
Author(s)	井上, 昌保
Citation	基督教学, 32, 33-36
Issue Date	1997-06-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46584
Type	other
File Information	32_33-36.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評

伊藤　悟著『神の揺さぶり――はじめてキリスト教と出会う人たちへ――』（一麦出版社、一九九六年）

井上昌保

本書は、書名の副題が示すように、「はじめてキリスト教と出会う人たちへ」のキリスト教入門書である。その執筆の意図は、書物の構成、内容展開において、見事に達成されている。それは、キリスト教学校の宗教主任・キリスト教学講義担当者というキリスト教教育の中心的担い手として、今日的な状況における学生、生徒に対して、人間存在と生き方の根底を問い続けてこられた教育実践に裏付けられているからでもある。

キリスト教入門に類する書物は、すでに数多く出版されているが、その割りには、はじめてキリスト教と出会う人たちにとっての適切な入門書は、かならずしも多くはない。これは、同じくキリスト教学校に勤務する評者にとって、長年抱いてきた率直な見解である。思うに、それは、主として入門書執筆者のキリスト教教育の捉え方に起因する。キリスト教教育を教会教育あるいは信徒教育と狭義に捉える限り、直接「キリスト教への教育」を意図して執筆する場合が多いので、入門書といえども、積極的求道者以外には、受け手における意識のズレがあって、とっつきにくいものとなってしまう。ところが、キリスト教学校は教会の外縁にあって、いやが上でも世俗主義と自然主義的合理主義の申し子とも言うべき学生、生徒を対象とせざるをえないので、ここでのキリスト教教育は学生、生徒の意識状況や生活実態と切り結んで展開せざるをえない。キリスト教学校のキリスト教教育を「キリスト教による教育」と規定する所以でもある。誤解を避けるために付言するが、「キリスト教への教育」と「キリスト教による教育」とを二者択一の対象として分立させているのではなく、両者の領域は、イエス・キ

リストの福音を基軸とした同心円として描かれ、外縁に位置付けられる「キリスト教による教育」も、当然のこととして「キリスト教への教育」と重複し、さらにはイエス・キリストに収斂する。問題は、残念ながら異教徒が九九%を越えるわが国だからこそ、「キリスト教による教育」の分野を顧慮しないキリスト教教育論も、キリスト教入門書も、現実離れで実効性に欠けるのではないか、と言いたいのである。

この意味において、本書は、著者が言う通り、キリスト教学の副読本であるにとどまらず、わが国におけるまさに待望の「入門書」であると言うべきものである。

「トータルな人間を問題にしていくことを共通の出発点としたい」とする本書は、その意図にもとづいて、次のように構成されている。

はじめに
I 「キリスト教」の課題
1 価値観の形成のプロセス、2 宗教の本質と無宗教の問題、3 人間実存の問題、4 人間理性の問題、5 人間の罪の問題
II 「キリスト教」の切り口
1 キリスト教歴史観、2 キリスト教世界観、3 キリスト教人間観、4 キリスト教生死観、5 神の救済と終末論的希望
III 「キリスト教」の糸口
1 聖書とその構造、2 イエス・キリストと神の国、3 イエスの教えと十字架の死、4 イエスの復活と「新しい生き方」、5 まことの神にして、まことの人
IV 「キリスト教」の試み
1 「正義」の問題とキリスト教、2 「自由」の問題とキリスト教、3 「愛」の問題とキリスト教、4 人間らしさの回復と仕える人生、5 人間の限界状況と信仰的決断
V 「キリスト教」の展開
1 教会とキリスト教、2 教会の使命と働き、3 祈りのある生活、4 主の祈り、5 聖なる揺さぶり

付録
イエスのたとえ話一覧(共観福音書)、旧約時代略年表、新約時代略年表、教会史略年表、教会暦、プロテスタント系学校関係教派別一覧
あとがき

各章・節は、読者の置かれている状況や問題意識、各人の生き方、ライフ・スタイルを問いながら、キリスト教からのメッセージを語り、まさに「神の揺さぶり」による価値観の転換が促されている。各章の末尾には、その章にふさわしい参考図書が紹介されていて、文中にもM・ブーバー、キェルケゴール、A・ニーグレン等々の諸説が紹介され、とくに聖句の適切な引用があって、説得力を増している。なお、付録として掲げられたものは、読者の理解を助けるだけでなく、参考資料としても大変有益であり、ここにも著者の配慮がうかがわれる。

最後に、若干気になったところとして、「Ⅳ」の「2」「自由の問題とキリスト教」の論述のところ、M・ルターの『キリスト者の自由』の冒頭の有名なパラドキシカルな二つの命題に触れた後で、二つ目の命題から「人間が真に自由であるのは、この一点に尽きる。徹底して仕えていくこと、これはまさに民主主義を越えた生き方、ギブ・アンド・テイクを越えたギブ・アンド・ギブの生き方である。仕える人生、これこそが自由への秘訣である。」と述べられているが、この部分とその後の文章にも、信仰義認による罪からの開放というキリスト者の自由の本源的な根拠が述べられていない点、ルターの一つ目の命題への説明が十分でないためでもあるが、画竜点睛を欠く恨みがある。この章の結びに「自由は、神から与えられた人間の最大の特権」と述べられているだけに、なおそう思うのである。もう一つ「Ⅳ」の「4」のところ「職業の問題」を述べる関連で、M・ウェーバーに触れられているが、「ウェーバーは、資本主義経済はキリスト教の自由によるものであり、どの職業もBeruf, として勤勉に遂行されなければならないことを主張している。……勤勉さが要求される一方で、人間には禁欲が必要であるという。」という説明は、ウェーバーのテーゼに則してみていかがなものであろうか。周知の通り、ウェーバーのか

の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の》精神《』のテーゼは、プロテスタンティズムわけてもカルヴィニズムの世俗内的禁欲倫理、すなわち職業倫理が、新しい近代資本主義の》合理精神《を生み出したというものであって、ウェーバー自身論点をきわめて厳密に限定していて、俗流ウェーバリアンのように、プロテスタンティズムが資本主義を生み出した、などとは決して言っていないからである。

ともあれ、本書が現代を生きる若者にとっての最適の入門書であることに変わりはない。本書を通して、多くの若者がイエス・キリストの神と出会い、価値観と人生を大いに揺さぶられ、新しい自己の形成におもむくことを、心から期待しかつ祈念したい。